

年間第25週 火曜日 9月22日

教会の判断基準は神の言葉にある

第一朗読 (エズラ6章7-8・12b・14-20節)

7「その神殿の工事をさせることにせよ。ユダの長官と長老たちは、かつて神殿があつた場所にその神殿を再建しなければならぬ。8 この神殿を建てるために、あなたたちがそのユダの長老たちを援助することを、わたしは命ずる。その経費はユーフラテス西方からの税収による国費によつて賄われ、滞りなく正確にそれを彼らに与えよ。

12 (この命令をあえて犯し、エルサレムにあるこの神殿を破壊しようとする王や国があれば、そこを御自分の名の住まいとされた神が、一人残らず滅ぼされるように。) わたしダレイオスが、この命令を下す。命令どおり実行せよ。」

14 ユダの長老たちは、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの預言に促されて順調に建築を進めていたが、イスラエルの神の命令と、ペルシアの王キユロス、ダレイオス、アルタクセルクセスの命令によつて建築を完了した。15 この神殿は、ダレイオス王の治世第六年のアダルの月の二十三日に完成した。16 イスラエルの人々、祭司、レビ人、残りの捕囚の子らは、喜び祝いつつその神殿の奉献を行った。17 この神殿の奉献のために雄牛百頭、

雄羊二百匹、小羊四百匹をささげ、また全イスラエルのために贖罪の献げ物としてイスラエルの部族の数に従つて雄山羊十二匹をささげた。18 そしてモーセの書に書き記されているとおり、エルサレムにおける神への奉仕のために、祭司たちをその担当の務めによつて、レビ人をその組分けによつて任務に就かせた。

19 捕囚の子らは、第一の月の十四日に過越祭を行った。20 祭司とレビ人は共に身を清めていたので皆清く、捕囚の子ら皆のため、仲間の祭司のため、また彼ら自身のために、過越のいけにえを屠った。

福音 (ルカ8章19-21節)

19 さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のためになづくことができなかった。20 そこでイエスに、「母上と御兄弟たちが、お会いしたいと外に立つておられます」との知らせがあつた。21 するとイエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行ふ人たちのことである」とお答えになった。

朗読から祈りへ

— 現実の中に —

バビロンに捕囚の身となっていたイスラエルの民はペルシアの王キュロスの柔軟な政策によつて救われたといつてもいいでしょう。エルサレムに帰ることができたのですから。キュロスはさらにエルサレムに神殿を再建することを認め、資金援助さえします。後の王大レイオスもキュロスの政策を受け継ぎ、神殿の再建を保護し、前五一五年に神殿が完成し、大きな喜びの中で奉獻されました。

キュロス王もダレイオス王もイスラエルの神を信じていたわけではありません。しかし、イスラエルは、その現実の中に主なる神の働きを見ます。主が、そうさせたと受け取るのです。

イスラエルの信仰を受け継いでいるわたしたちの信仰。すべてのものの主である神は、すべてのものを治め、すべてのものの中で働いておられる。人は自由を与えられているので神の意に反することもできるとはいえ、神

は人を支え、ご自分の思いに導き、ご自分の意志を人の行為を通して実現していきます。現実の中に神の働きを見る人は幸いです。自分の思いが実現することを望むとき、そうならない現実を見てがっかりするものですが、現実の中に神の思いが実現していることを見抜く信仰の目をもっている人は幸いです。

— 聞き、行う —

今日の箇所は種蒔きのたとえの結びになっています。8章4節で人々に「種蒔く人」のたとえが語られ、続いて弟子たちへの説明があり、「ともし火」のたとえが続きます。弟子たちに話したあと、ふたたびイエスは人々に語ります。この流れの中心にあるのはみ言葉です。たとえの説明でイエスは「種は神の言葉である」と言います。「ともし火」のたとえでは「どう聞くべきかに注意しなさい」と言います。そして、今日の箇所では「神の言葉を聞いて行う人」が新しい人のつながりを作ると言います。それは血縁をはるかに越える神と人との、また、人同士の強いつながりです。

わたしたちは主日に共に集い、主のみ言葉とご聖体の食卓にあずかります。神の言葉が

人々の前で読まれます。それは「入って来る人に光が見えるように」なるためです。この言葉をどのように聞くべきか、聞き方に注意を払わねばならないでしょう。わたしたちが聞いたことが、外で明らかにするからです。聞き方を間違えば、その内容も、伝わり方も間違ってしまうです。

この小教区で創立五〇周年を祝ったときのことを思い出します。三年前から準備を始めました。具体的な準備が始まったのは半年前で、それまでは主日に読まれる「神の言葉」を理解し、受け止めることを一番大切にしました。聞き方に注意しながら…。

聞いたことが明らかにあります。五〇周年を機に、たしかに共同体が変わってきました。自分の思いを優先しないこと。神の望みを最優先すること。その神の望みは「神の言葉」に明らかにされていること。価値、判断の基準をつねに「神の言葉」に置くこと。

教会では、ときとして血縁関係や上下関係、信者歴? の長短などに基ついてものごとが判断されたりします。そのような関係を越えて純粋な「善い心で」み言葉を聞くことからすべてが始まります。この出発点を忘れると変な教会になってしまいます。

(M・M・Y)